

なものの相対化の作業があります。それは、時代の違いを念頭に置いたイスラーム的なものの相対化であり、イスラーム的なものの分析を介して、近代と前近代という観念的な時代を分かつ垣根を壊すことです。次は法制史家、寺田浩明氏の文章です。

先に英法について見た如き、取引に公権力を介在させることにより「未来そのものを現在化する仕組み」というよりは、(旧中国法での「契約」は、)むしろ当事者同士で相談して不確定な「遠く大きな未来」を当事者間だけで処理できる程度の「近くて小さな未来」に細分化して行く手法であることも明らかであろう。……ここでは工夫をすればするほどに、事態はどんどんと現に目の前にある財の間の等価交換に近づいてゆく、つまりは行う契約自体が将来に履行を残す類の契約ではなくなっていくのである。(寺田浩明「合意と契約——中国近世における「契約」を手掛かりに」三浦徹・岸本美緒・関本照夫編『比較史のアジア 所有・契約・市場・公正』イスラーム地域研究叢書4巻、2004年、108頁)

寺田氏はここで、近代英法と伝統中国の旧中国法における契約観を比較しているのですが、そこで旧中国法での特徴として述べられている、「当事者同士で相談して不確定な遠く大きな未来を当事者間だけで処理できる程度の近くて小さな未来に細分化して行く」、「工夫をすればするほどに、事態はどんどんと現に目の前にある財の間の等価交換に近づいてゆく」契約手法は、まさにイスラーム法における契約手法の特徴と同じです。

そして、寺田氏は、こうした短期的な契約手法が伝統中国での近代資本主義への移行を阻害した要因であったと主張しています。ところが、現代の情報社会、IT社会では、大規模工場の建設のための設備投資を可能にさせた長期的な契約が企業運営の足かせになっています。そのため、流動的な企業環境の変化に迅速に対応しなければならないベンチャー企業などは、短期的な契約で資金を調達するようになり、またそれができるようになっています。

つまり、伝統的なものが古く、近代的なものが新しいというわけではなく、現在の企業環境のもとでは、近代的と称されたものが古くなり、克服すべきとされた伝統的なものが新しいものになっています。ここでは契約観を取り上げましたが、イスラームの伝統のなかには、ほかにも多くの現代の生活環境で生かすことができるものの考え方があるように思えます。

しかし、それはイスラーム独自のものではなく、契約観についての伝統中国との比較で論じたように、ほかの伝統文化にも見られるものだと思います。我々がおこなうべきことは、イスラームに独自のものの考え方を追究する一方で、それを引き金にして、地域文化、時代区分の観念的な境界を乗り越えるべく模索することだと思います。私はこれまで、イスラームのものの考え方には、こうした地域、文化、時代を相対化する媒体として機能できるだけの一般性があると信じて、研究を続けてきました。以上です。

*****質疑応答*****

質問1 お話しをお聞きしていて、加藤先生が、物質面からイスラームについて考えてきた研究者をどのようにご覧になっているのかということに非常に興味を持ちました。例えば、佐藤次高先生。最後のお仕事の一つは砂糖の話で、佐藤先生の物質面やモノへの関心というのは相当高かったのだと思いますが、それは、加藤先生の主な関心のモダニティとイスラームを共に脱構築するというと

ころにも非常に近い関心があったのではないかなと思います。そういう仕事を恐らく同じような環境でやられてきた加藤先生は、どういうふうに刺激を受けたりとか時代をつくったりしてきたのでしょうか。

もうお一方は家島彦一先生です。今回のお話でネットワークというお話も出ましたので非常に近い研究関心をお持ちのような気がします。大きく言えば物質面からイスラームを見るという研究関心。また、イスラームありきではないというところ。こうしたアプローチというのはおそらく海域史という分野だけではなく、それを含む最近のグローバルヒストリーというような流れの中で相当盛り上がりを見せていると思います。そういう研究の最近の大きな動向を、どのようにご覧になっているかを教えていただきたいと思います。

加藤 私の本日の話にとって、核心を突いた質問だと思います。正直に述べて、佐藤次高先生は家島彦一先生の業績を批判的にみていました。その批判は、私に言わせれば、本日の話で述べたネットワークとネクサスとの関係の議論に係ります。一言で述べると、家島先生の関心はネットワーク分析に、佐藤先生の関心はネクサス分析にあったということです。

ネットワーク分析とネクサス分析との関係について、両者には観察対象との距離において違いはあるが、同じ対象を観察しているのだ、と述べました。そこでの違いは、分析単位の大きさの違いでもあります。「鳥の目」から観察するネットワーク分析は、点と線として描かれるネットワークを観察するために広い空間を分析範囲にしなければなりません。これに対して、ネットワークの束として描かれるネクサスを分析するためには、「虫の目」をもって、定点観測、つまり狭い空間を分析範囲にします。

家島先生は一つ一つのネットワークが描く点と線に興味をもっておられるのに対して、佐藤先生はいくつものネットワークが織り成すくもの巣のような社会関係に興味を持っていたと思われる。その意味で、佐藤先生は歴史研究者である前に、地域研究者だったのかも知れません。そう考えると、家島先生のように、ネットワークの一つ一つについての分析に物足りなさを感じたとしても理解できます。

しかし、これは私に言わせれば、研究者の嗜好と能力の問題で、優越の問題ではなく、ともに補い合うべき二つの分析手法だと思います。イスラームとの関係で言うと、イスラームが社会関係を織り成す大きなネットワークの一つであることは自明なのですが、ネクサス分析ではイスラームはネットワークの一つでしかありません。

そのため、佐藤先生はイスラーム地域研究のプロジェクトを立ち上げましたが、イスラームそのものにはさほどの興味を抱いておられなかったのではないかと思います。というか、興味のあるなしではなく、鳥瞰的に見て、イスラームをネットワークとする世界の模様を描くことを好むタイプの研究者ではなかった、ということだと思います。今でも、私がイスラーム世界という言葉を使ってものを書き始めた頃、「自分が考えるイスラーム地域とは、君が言うイスラーム世界ではない」と叱責に近い強い口調で、私を批判したことを思い出します。私自身は「小さな窓」から世界を見ることを好む、ネクサス分析派だと思っているのですが。

質問 2 加藤先生はイスラーム経済に対する見方として二つの立場があるとおっしゃっていると思います。一つは、イスラームの独自の世界観があるという見方、もう一つは、近代経済学的手法でも分析可能であるという見方です。その上で、加藤先生はイスラームの経済の中に体系化された

経済論みたいなものはないとおっしゃっています。一方で加藤先生は、ワクフやヒヤーズのような「制度」に言及しているわけですが、イスラーム経済というのは、「システム」として存在しているのかどうかお考えを教えてくださいたいと思います。

加藤 この質問は、私のイスラーム観をストレートに突く質問です。そして、それに対する私の答えははっきりしています。それは、イスラームには経済に関する明快なビジョンはあるが、具体的なプログラムはないというものです。

本日はイスラームのものの考え方を中心に話をしたのですが、歴史家としてもっとも興味を持っているのは、7世紀以降、イスラームの言説に基づく経済行動が紆余曲折を経ながらも続いてきたという事実です。このイスラームの言説に基づく経済行動をイスラーム経済と呼んでおきましょう。

そして、そのイスラーム経済が続いてきた理由ですが、私はそれを、イスラームが近代資本主義と同じく、明快なビジョンはあるが、具体的なプログラムを持たないことに求めているのです。資本主義は、自由主義という理念あるいはビジョンに導かれて出発したのですが、個々の政策はあったものの、具体的で統一的なプログラムがあったわけではありませんでした。

しかし、それは生き残り、現在では、資本主義に代わるオルタナティブはないような状況です。資本主義はその発展の過程で、社会主義に代表される対抗馬との競争のなかで勝ち抜いてきました。それは社会主義との対比であきらかだと思えますが、具体的で統一的なプログラムに縛られないで、変化する現実の経済状況に柔軟に対応してきたからだと思えます。

イスラーム経済も同じだと思います。そのため、イスラーム経済は空間的にも時間的にも、そして制度的にも、多様に展開してきました。イスラームのビジョンを現実の社会で実現するために、ワクフとかヒスバとかの制度が作られました。そのため、こうした制度のなかにイスラームのビジョンが反映しているのは当然にことです。

しかし、お尋ねのシステムとなると微妙ですね。ここでのお尋ねのシステムとは具体的なプログラムのことではないでしょうし、イスラームに特徴的な制度の集合体でもないでしょう。それは具体的なプログラムの立案の背後にあり、いくつもの制度を貫き結びつけるなものか、ということになるのでしょうか。これは、これから深く考えなければならぬ点ですが、一つだけ言っておきたいと思えます。

本日の話のなかで指摘したことですが、たとえ経済を議論する場合でも、そこでのイスラーム的なものを問おうとするならば、一元論的なイスラームの世界観や知の体系とに注意を払わなければならないということです。そうであるならば、イスラーム経済のシステムについての議論は、イスラームが体制であった前近代と、そうではなくなった近現代とを区別して、論を立てなければならないと思えます。

質問3 加藤先生が長らくいらっしゃった一橋大学は、東大や京大の経済学部とは違って、社会経済史にかなり重きを置いていて、阿部謹也先生や渡辺金一先生のように非常にユニークな学説を打ち出した先生方が数多くいらっしゃいました。そうしたところで先生は長く研究をなさってきたわけですが、そのような一橋大学独自の学統のようなものをどういうふうにお考えなのかなというところを伺いたいと思えます。

加藤 過去を振り返っての言説は後知恵となることがほとんどですので、酒席で友人たちと馬鹿話

をするときはともかく、このような場で、自分の所属した大学での私的な生活をしゃべることは好きではありません。そこで、当たり障りのないところで。

私は先ほど、研究における分析単位設定の重要性を指摘しました。それは、研究生活、さらには日常生活でも同じで、距離とかスケール、つまり生活範囲は重要だと思ってきました。スケールメリットという言葉があります。それは通常、規模が大きいことのメリットを指します。

しかし、私はスケールが小さいことのメリットもあるのではないかと考えてきました。私が一橋大学での学生生活と教員生活で享受したのは、この生活範囲のスケールが小さいことのメリットではないかと考えています。もっとも、そのためには条件があります。それは、フランクで自由な人間関係と意見交換の場が確保されているということです。この点、私は恵まれていました。

すでに述べたように、私が学生であったとき、大学にはイスラームはおろか、アラブについても中東についても、それらを研究している先生は一人もいませんでした。しかし、私のゼミの先生であったインド史専攻の深沢宏先生も、ビザンツ史専攻の渡辺金一先生も、ドイツ中世史専攻の山田欣吾先生と阿部謹也先生も——渡辺、山田、阿部の三先生は「西洋史の三キントリオ」と呼ばれていました——、中国史の村松祐次先生と中川学先生も皆、世界史的な視野を持ち、学生の私と会うたびに、これからアラブ、中東、イスラーム世界は重要になるから頑張りなさい、と激励してくれていました。

また、専門に厳格な先生たちでしたから、逆に、専門外のテーマについては、私が一介の学生であるにもかかわらず、質問をしてくる。たとえば、イスラームについて、「君はイスラームを研究しているのだから聞かすが、これはどういう意味」と問いかけてきました。こうなると、学生である私は、勉強せざるをえないというわけです。また、こういうこともありました。

私の大学の先生である深沢先生はインド史を専門にしておりましたが、中世と近世のインド史を研究するためにはイラン史を理解しなければならないというわけで、1年間のサバティカルでの海外滞在でも、半年はロンドンに、半分はテヘランに滞在しました。そのような先生でしたから、1979年にイラン・イスラーム革命が起きたとき、これは驚きだということで、インド史の授業をやめ、イラン史の授業をし、ゼミでは開発経済のテキストをやめ、ホメイニ師関係の本を読みました。

こうした深沢先生のほか、先に挙げた私の周りにおられた先生たちは、知的なフットワークが軽い。それは先生たちが現代につながる世界史についての広い視野を持っていたからですが、その大きなモチベーションの一つは、東京大学を頂点とした「帝国大学」への対抗心であったと思います。「君たちは組織ではなく個人で、日本ではなく海外で勝負しなさい」とは、よく聞かされた言葉です。

当時、経済学部の教員からは、マルクス経済学ではなく近代経済学を、理念よりは統計を、理論よりも実証を、などの掛け声を聞いたものです。今は、まったく様変わりしていますが。そのなかにあって、一橋大学の歴史学は特異な歴史を歩みました。商科大学といういわばカレッジから出発した一橋大学は、戦前にドイツ歴史学派の影響を大きく受けました。歴史のなかに経済法則を探ろうという学派です。そして、戦後、現在の四学部体制に移行するとき、ドイツ歴史学派に影響を受けた歴史学者たちの多くが経済学部に所属することになりました。現在、一橋大学の歴史家たちが経済学部に所属するのを不思議がるむきもありますが、それはこういう歴史があったのです。

つまり、私の周りはいまから考えれば、知的なサロンという趣でした。人間関係もフランクで、学生の私は、酒の好みで先生方を分類し、面白がっていました。たとえば、深沢先生の好みはビールと餃子、渡辺先生はワインとチーズ、中川先生はウイスキーとチョコレート、そして飲む場所は、それぞれ大衆中華レストラン、ご自宅、銀座のクラブ。今から振り返ると、大先生に不謹慎なこと

を考えていたものだと思いますが、いまでも、この分類は先生たちの学風をうまく表現していると内心、自負しています。ちなみに、私はなんでもこいですが、一つ選べといわれれば、ビールと餃子です。

以上が、私の言う小さなスケールのメリットです。私は学生時代、専門も、研究テーマも、研究対象も違った先生や学生に囲まれて生活していました。私は大学で教育に携わるようになって、考えたものです。研究者になろうとする若者にとって、学生時代、一つの専門的なツールを磨くのと、回り道をしてでもさまざまな状況に身を置いて広い視野を持つのと、どちらが研究者の将来にとって、有益なのだろうか。私個人は、選択の余地なく、後者の道を歩まざるを得なかったのですが。

ただ、社会が日進月歩、急速に変化している現代において、このようなサロンのような研究環境には大きな限界があると思います。自分がお世話になった大学を悪く言いたくはないのですが、一橋大学の将来はどうなるのだろうかと思うことがあります。というのも、現代では、市場や社会生活での付加価値は、技術や文化によって作られています。ところが、一橋大学は社会科学の大学で、新しい技術や文化を創造する理科系の学部や人文系の学部を持ちません。

たしかに、社会科学は技術や文化を組織し運営するのに長けており、一橋大学はこれからも有能な組織者、経営者を輩出し続けることでしょう。しかし、彼らの仕事は「運営」であって「創造」ではない。そこに、学府として知のダイナミズムに欠ける可能性がある。これは、小さなスケールの大学のデメリットかなと思います。その点、総合大学は、大きなスケールのメリットがあると思います。これまた、条件つきですが。

質問4 歴史学をどうお考えになっているかというのを、是非伺いたいと思います。私のように思想史をやっていると、思想と社会を動的に結びつけてやると言っているのですが、社会がどうなっているかの方は歴史学の成果に相当負うわけです。われわれの若い頃は、まだ大理論があった時代です。今日のお話を伺っても、加藤先生は単系的な発展史観を超えて多元的な観点から研究をずっとおやりになっていることがよくわかるわけですが、発展史観とか発展段階論といった大理論がなくなったり、時代区分論もなくなったりしてきた中で、歴史学そのものが、これから21世紀の真ん中に向かって、どう行くべきとご覧になっているのかを教えてくださいたいと思います。

加藤 直接的なお答えになっていないかもしれませんが、私は歴史学と歴史意識は分けるべきだと思っています。私が若い頃、日本の人文社会科学のアカデミズムでは、『民博通信』のエッセイで書きましたが、理論と実証という区分において、実証研究とは、ほぼ歴史研究でした。若く有能で実証に興味を持った研究者の多くは、歴史研究の戸をたたいた。それは、ご指摘にあった大理論がまだ健在の時代でした。

現在は様変わりです。かつてのように使命感を持って歴史研究を志す若い研究者は、本当に少なくなりました。なぜそうなったのか。ここは、この点を論じる場ではありませんから触れませんが、歴史研究がまだまだ華やかな時代に研究を始めた私でも、現在の歴史学にあまり魅力を感じません。時代区分を巡って論争するような歴史学に、若い研究者がそっぽを向く気持ちは、よく分かります。

一言で述べれば、現在の歴史学は「現実」の裏づけを欠くようになってしまったのだと思います。しかし、繰り返すことにはなりますが、私の若い頃の歴史学は実証の学問だったのです。実際、当時の歴史研究を担ったのは、文学部の歴史学科のスタッフよりも、経済学部や法学部などの、社会科学の学部のスタッフでした。

歴史学は、精緻な論証手続きを磨いてきました。その意味で、一つのディシプリンだと思います。しかし、ほかのディシプリンと違って、「過去」ということを除けば、特定の研究対象、研究テーマを持ちません。したがって、歴史学の総体は、経済史、法制史などのような、何々史の集合体です。そのなかにあって、歴史学を一つのディシプリンとしているのは、先に述べた精緻な論証手続きと、「過去」に対する姿勢だと思います。ここでは、後者の「過去」に対する姿勢を、歴史意識と呼びたいと思います。私が言う「過去」に対する姿勢とは、簡単に言えば、過去を踏まえて現在を観察・分析するということです。このことを、自然科学者との共同研究の体験を紹介しつつ説明してみましよう。

ここ10年、オアシスの村社会研究で、自然科学者と共同研究をしてきました。正直に言って、人文社会学者と自然科学者はその研究姿勢において、水と油です。お互いを異星人と見ています。それにもかかわらず、我々は共同研究を続けることができた。それはなぜなのか。それを理解する鍵は、自然科学者の一人が言った次の言葉に示されています。つまり、彼は次のように言ったのです。「私はあなたの言っていることをよく理解できない。しかし、一つだけあなたは面白いことを言った。それは、歴史として残されたものには何らかの合理性や価値がある、という言葉だ」というのです。

私が言った言葉は、歴史をやっている人間にとっては、当たり前のなんでもない言葉ですが、なぜ彼はそれを新鮮に感じたか。その理由は、自然科学者は通常、理想的なモデルを基準に現実を見ているからです。モデルは理想ですから、どんな現実にも何がしかの瑕疵がある。それを修正、改善し、理想に近づけるのが、自然科学者の仕事であるというわけです。

実際、村に入った当初、彼は我々に村の灌漑責任者から水の分配方法と分配量を聞いてくれと頼みました。そこで、我々はそれらの情報を聞き取って、彼に報告しました。しかし、次に彼がとった行動は、広大な耕地のなかに、実験場を作って、運河に流れる水量や畑が冠水する時間などを測ることでした。そして、その結論として、「ああ、村の灌漑責任者が提供した水の分配方法と分配量はほぼ合理的だ」といったのです。

この事実を知ったことは研究成果の一つでしたが、内心、やはりそうだったのかとも思いました。というのも、結局、彼が信用するのは実験場での測量結果であり、そこから有意な結論を引き出す基準は灌漑責任者からの情報ではなく、効率的な水利用のモデルだったからです。もちろん、彼は自然科学者として、当たり前のことをしただけですが。

私はこうした自然科学の分析手法を否定しようとは思いません。しかし、人文社会科学が分析の対象とするのは人間であり、人間の行動や社会について、自然科学の分析手法が適用できる範囲は限られています。また、理想的なモデルを基準とした分析が正しい結果をもたらすとは限りませんし、それ以上に、そのことがかならず人の幸福につながるとも思いません。

歴史的に残されたものの中には、合理的でないものもあるでしょうし、合理的なものであっても、歴史のなかで消えていったものもあったでしょう。しかし、そこには合理性があるに違いない、と残されたものに接し、その合理性を過去の歴史に探るという姿勢、つまり私の言う歴史意識は、人間を研究対象にするほかの人文社会科学においても有効な分析手法だと思っています。大理論なき歴史学の将来については、本日の話で述べたように、既存の概念に囚われず、マクロ分析とミクロ分析の間、ネットワーク分析とネクサス分析の間を際限なく行き来するなかで、新しい歴史解釈を生み出す作業を続けるしかないと思っています。

司会 はい、それでは時間も過ぎてしまいましたので、まだまだ話は尽きないと思いますけれども、

ここで加藤先生の講演会を終わりにさせていただきたいと思います。どうもあらためましてどうも、ありがとうございました。

加藤博先生——業績——

1976年

- ・「中世エジプトの貨幣政策」『一橋論叢』76巻6号、107-115頁、【論文】
- ・Abraham L. Udovitch, *Partnership and Profit in Medieval Islam*, 『オリエント』19巻2号、152-156頁、【書評】

1977年

- ・「貨幣史からみた後期中世エジプト社会—E・アシュートルの中世エジプト物価史研究に寄せて」『社会経済史』43巻1号、73-88頁、【論文】
- ・「マクシム・ロダンソン『イスラーム教と資本主義』」『アジア研究』24巻1号、79-84頁、【書評】

1980年

- ・「19世紀エジプト土地制度史研究—学界事情と資料紹介」『一橋論叢』84巻6号、31-47頁、【論文】
- ・「19世紀前半のエジプト土地・税制度」一橋大学地中海研究会編『論文集・地中海地域における集落形成の諸問題』67-78頁、【論文】
- ・「19世紀後半のエジプト土地・税制度」『オリエント』23巻1号、1-22頁、【論文】
- ・“Egyptian Village Community under Muhammad ‘Ali’s Rule: An Annotation of ‘Qānūn al-Filāha’,” *Orient*, vol. xvi, pp.183-222、【論文】

1981年

- ・「カフル・シュブラフール村の村方騒動—19世紀エジプトにおける私的土地所有権の確立とイズバ農民」『東洋文化研究所紀要』87冊、51-116頁、【論文】

1982年

- ・「エジプトにおける私的土地所有権の確立」『東洋文化研究所紀要』91冊、1-179頁、【論文】
- ・「19世紀中葉におけるエジプト灌漑行政」『一橋論叢』88巻5号、61-78頁、【論文】
- ・「エジプト農村社会における村落有力者層—Leonard BinderのSecond Stratum論をめぐって」『オリエント』24巻2号、79-95頁、【論文】
- ・“A Riot in the Village of ‘Kafr Shubrahūr’: A Case Study on the Impact of the Establishment of Private Land Ownership on Peasants in 19th Century Egypt,” *The Mediterranean Studies Research Group ed., Population Mobility in the Mediterranean World: Studies in the Historical and Contemporary Aspects.* Hitotsubashi University, pp.165-181、【論文】

1983年

- ・「近代エジプト農村社会研究のためのノート」『東洋文化』63号、211-236頁、【論文】